

大愚良寛から會津八一へ

北 嶋 藤 郷

はじめに

江戸末期の禅僧・良寛（1758-1831）の残した、漢詩は600余首、和歌は1300余首、俳句は100首ほどにすぎないが、良寛の生きざまを表す句として知られる「たくほどは風がもてくる落葉かな」など、世界的に知られる名句を詠んでいる。良寛の書は、書聖と謳われた空海をものぞぎ、日本美の至上境といわれている。哲学者・唐木順三は名著『良寛』（1971）のなかで、「良寛にはどこか日本人の原型のようなところ、最後はあそこだというようなところがある。」と述べている。良寛はもっとも日本人らしい日本人であり、日本的な詩人といえる。良寛は「もののあはれ」を知る人であった。「あはれ」の奥には慈愛の心があるのだが、良寛はそういう心をもった人であった。

そもそも良寛の詩歌が外国語に翻訳されて、海外に紹介されたのたのはいつであったか詳らかでない。おそらく仏教哲学者・鈴木大拙が良寛の和歌と俳句を英訳して紹介したのを嚆矢としてよいであろう。

良寛は越後の国上山の五合庵に20年ほど住んだが、夜盗に押し込まれたことが1～2度あった。良寛のような清貧の人を掠めようとしても持って行くものなど何もないのだ。良寛はそれを見て心を痛めて、着ているものを彼にやった。

賊は戸を開け放したまま急いで立ち去った。そこから明るい月光が部屋に射し込んだ。詩僧・良寛が面目を發揮した。大拙は良寛のこの行為を「愛の化身—観音菩薩の現われであった」と描写している。良寛は愛の人と表現してもよい。

A burglar failing to carry off the moon,
It shines in from the window!

禅の碩学・大拙が良寛の有名なこの俳句「盗人にとり残されし窓の月」を英訳して紹介したのは、昭和13年（1938）のことであった。

大拙が良寛の和歌を英訳で紹介とほぼ同時期に、旧制新潟高校で教鞭を執ったドイツ人教師のヤコブ・フイツシエルの英語版『蓮の露』

(1937)が発刊された。このころから良寛の名声が日本全国に広がり、良寛を敬慕する人々が急増していった時期である。『大愚良寛』(1918)の著者である相馬御風は、フィツシエルの訳業によって、日本の良寛から世界の良寛になりつつある、と絶賛した。

良寛と時代がほとんど重なるイギリスの詩人・ウィリアム・ワーズワースは「低く暮らし、高く思う」(Plain living and high thinking)と詩の中でうたっている。フィツシエルは、良寛の生涯と芸術をたどった上記の著書の冒頭で、「わたしの持物は、ブナの鉢ひとつ、カエデの皿一枚」(A breechen bowl, a maple dish, my furniture should be;)というワーズワースの詩句を引用している。また同書の掉尾を飾る言葉に、ゲーテの「移ろいゆく物すべてこれ単なる象徴にすぎない」(All that is transitory is merely a symbol!)が引かれている。前者の詩句には、良寛詩にしばしば登場する「一衣一鉢」という山中独居の草庵思想が、後者のそれには、唯一絶対の真理「一如」という仏教思想が通底しているように思われる。

アメリカでも良寛のごときシンプル・ライフの追及は、古くピューリタンの時代からひとつの伝統をなしてきた。アメリカの哲学者H.D.ソローは、コンコード郊外にあるウォールデン湖畔の森の中で、自分で小屋を建て、独居の生活を営んだ。独立と自由を妨げる人生の一切を排除して、人生の根本的な真実のみに直面し、自然が教えてくれるものを自分がどれだけ学び取れるかどうかを確かめる生活実験をした。ソローは「人生を単純化せよ、単純化せよ」と説いている。また、古代ローマの哲人セネカの言葉や17世紀のドイツの宗教詩人・シレジウスの『瞑想詩集』(1675)などを読んでも、言葉や風俗を超えて、良寛の生き方と心がひびきあうものがあるのに驚くのである。良寛は人生哲学的な言葉は残さず、詩歌によってそれを暗示したのみであるが、彼らの精神的な系譜につらなっていることがわかる。逆に視座をぐるりと転回すれば、良寛の優れた人格と彼に象徴される東洋思想が欧米の人々にも訴えかける魅力を十分持っていることが理解できるであろう。

わが国では、夏目漱石、北原白秋、川端康成などの文学者や日本画家の安田靉彦、こしの千涯など良寛を敬慕する文化人が多い。わけても川端康成の小説『山の音』(1954)のテーマは、良寛の「天上大風」と蕪村の句「老いが恋忘れんとすればしぐれかな」の間を行き来する主人公の心境表現を描いたものであると述べている。忘却が自分たちに食い込んでいくという老いの到来の前兆に怯えるすべての人々の心にひびく作品である。

最終章で主人公が「一度信州へもみじ見に帰らないか。」という会話が出てくる。郷里の紅葉のもとに、菊子を立たせてみたいのである。この小説の結末が、良寛の辞世の歌を彷彿とさせている。さらに短編小説「小雪」（1952）の中で、良寛の菓子屋三十郎に宛てた「白雪羔少々御恵みたまはりたく候」のエピソードと蕪村の俳画「しづるやとあるところに鷺ひとつ」を巧みに織り込んだ作品を残している。いささか説明めくが「白雪羔」という米菓は、蓮の実の粉も入れてあるので、疲労回復の効能があったといわれている。この無心は良寛自身が食べるのではなく、乳のでない母親のために、白雪羔を湯に溶き、乳幼児に与えようとして依頼したものである。良寛は短い言葉の手紙を「餘の菓子は無用」として結び、急ぎの無心であることを示している。

敗戦後の川端は、自身の言葉を借りれば、「日本古来の悲しみのなかに帰ってゆくばかり」の作家であった。

また作家水上勉は、9歳で両親とはなれて禅寺でくらし、19歳まで仏道修行をしたが、20歳で寺を脱走して、それ以後生家にも帰らなかった。水上の良寛への関心はそのことにもよるのであろう。良寛の実像を凄まじい気魄で描いた評伝『良寛』（1984）や短編「寺泊」（1977）がある。瀬戸内寂聴は、小説『手毬』（1991）を世に問うたことでも知られている。ノンフィクション作家・工藤美代子は、炎の女・貞心尼に焦点をあてた『良寛の恋』（2007）を上梓した。

そして、仏教の偉大さに魅せられた作家・立松和平は、『道元禅師』（2007）を10年がかりで完成した後、道元の思想をだれよりも忠実に実践した良寛と向き合い、『良寛』、『良寛 行に生き 行に死す』、『良寛さんの和歌・俳句』、『良寛さんの漢詩』、そして『良寛の言葉』などを2010年に、相次いで発刊した。

瞠目すべきは、家族を捨て、家を捨て、我が身も捨てて、生涯を愚に生きた良寛は、日本人に最も敬慕され、道元の思想を身心ともに実現した禅僧であるが、小説『良寛』では、その良寛禅師の生の軌跡があまりなく語られている。まことに残念なのは、あと6～7回分の原稿が未入稿の状況で急逝した。この小説は『大法輪』に掲載されていたが、編集者によると、一回分の原稿は、20枚であった、と聞いている。

身心脱落しんじんだつらくとは道元禅師が大宋国の天童寺でさとりさとりの境地に至った時のことを示す言葉である。「生涯に大きなさとりは一度二度、小さなさとりは数知らず」とは禅僧の間ではよく聞かれる言葉である。長い修行の果てに悟りの境地に至ることを大悟徹底というのである。曹洞宗のさる老師の話

として、「わが宗門には少なくともさとりの境地にたどりついた僧が二人おられる。一人はもちろん道元禪師で、もうひとり良寛さんだ。」という文言を立松は、『良寛 行に生き 行に死す』の中に記録している。

良寛は長詩の「夜読永平録（夜永平録を読む）」の中で、「身心脱落は唯だいちじつ一実のみ」（身心脱落こそは、ただ一つの真実である）と詠んでいる。道元は天童寺の正師如浄のもとでの修行の中で、師に「身心脱落とは何か」と問うた。すると師は、このように説いたのである。

身心脱落とは座禪なり。只管に座禪する時、五欲（財欲・色欲・飲食欲・名誉欲・睡眠欲）を離れ、五蓋（貪欲・瞋恚・睡眠・掉悔・疑）を除くなり。

無明を離れ、色・声・香・実・触の五欲など人間の持つありとあらゆる欲望をとり除く、すなわちさとりの境地である。箒ではいた石が飛んで竹に当たり、響いたその音で大悟した古仏もいれば、咲く桃の花を見て大悟徹底した古仏もいるという。

立松和平著『道元禪師』の中で、道元は暁天座禪が終わると、ただちに如浄和尚の方丈に焼香の香炉を持って上がった。「いかなされたのです」と如浄はただならぬ道元の様子を感じて問うた。道元は「身心脱落し来る」と静かにいうと、如浄和尚は「身心脱落、脱落身心」とくり返した。身心と脱落とはひとつのことで、さとりは体験としてしか感じることはできないと、和尚はいったのだということが道元にはわかった。

「さとりの境地とは、人それぞれの技量によって違うはずです。和尚さま、どうかみだりに私を印可（法を継ぐものとして認めること）しないでいただきたいのです」道元はへりくだってこういったのであるが、心は晴ればれとしていた。

道元は自己の悟道について、このように明らかにしている、が良寛の大悟徹底の瞬間はいつだったのか、さとりの契機についてはなにも語られていないのである。道元はいつしかさとっていたのである。良寛もまた、いつしかさとっていたのである。

寛政2（1790）年冬、玉島円通寺へきて、11年の修業の年月を経た良寛が33歳の時、師僧・国仙和尚は雲水修行が成就したという証明、すなわち印可を与えた。偈とは、師家が修行者の悟境を認可した証明書である。師の心が通っていて、その人物に相応しい、適切な証明書にもなっている。その偈文とは、下記のようなものであった。

良寛庵主に附す
 良や愚のごとく道うたた寛し
 騰騰任運誰か看ることを得ん
 ために附す山形爛藤の杖
 いたる処の壁間午睡閑なり

(良寛は大愚というとおり、愚人のごとく本来の精神をつつみ隠しているが、禅道を修める心を練り、その道はいよいよ寛く、愚の偉大さは誰もおよばない。／生き方になら技巧を弄さず、ゆるやかな自然の運行にまかせて、真髓を会得している。これを知るのは私のみだ。／よって私は愛用の山形の藤の蔓の杖を与えるから、行脚修行に勤めるのだ。／この杖は私の分身として、いたるところで壁に向かって座禅し、たとえ午睡の時でもいつもよき伴侶となるように。)

Ryokan, you look like a fool, but your enlightenment is wide,
 is profound;
 None can know your mind, entrusting all, as you do,
 to heaven and freed from things.
 I offer you this withered wisteria staff from the mountain
 so that wherever you travel,
 You will be so composed that your meditation hall or
 even your midday nap would be like a way of austerities.

上記の文面は、偈文の大意である。「大愚良寛」という号は、おそらく国仙和尚の命名であったかも知れない、と思うのである。良寛は正師国仙を心から慕い、師から与えられたこの「印可の偈」を終生手離すことはなかった。

現代文学にあまたの傑作を残して急逝した作家、立松和平の最後の未完の長編小説が『良寛』(2010)である。この作家は第5回親鸞賞を受賞したし、自然環境保護問題にも積極的に取り組んでいた。立松和平追想集『流れる水は先を争わず』(2010)が残された。弔辞は北方謙三が読み、作家仲間、友人、編集者など63名が追悼文を寄せている。2009年12月、塩入峠・良寛歌碑の傍らに立つ作家の写真も載っているが、最晩年の遺影である。「流れる水は先を争わず」とは、生前の立松の好きな言葉であった。団塊の世代の作家らしい独特のまる文字は、立松の自筆である。

シェークスピアの研究・翻訳でも知られる明治の文豪・坪内逍遙の作に『良寛と子守』（1929）がある。2005年6月、この作品が東京・歌舞伎座で上演された。良寛役の中村富十郎の名演技もさることながら、里の子のひとりとして初御目見得した富十郎の愛嬢で、まだ2歳にもなっていない愛子嬢の可愛らしい即興の演技が観客を湧かせた。

それにつけても良寛の思想と芸術が日本人の心に強くひびいてくるのはなぜであろうか。ノーベル文学賞（1968）に輝いた川端康成によれば、日本古来の心情を、日本の真髄を表している、ということになるであろう。ストックホルムで行われた川端康成のノーベル賞受賞記念講演の中で、「形見とて何か残さむ春は花 夏ほととぎす秋は紅葉ば」という良寛の辞世の歌が引用されている。E.G.サイデンステッカーの名訳を紹介しておく。

What shall be my legacy?
The blossoms of spring,
The cuckoo in the hills,
the leaves of autumn.

康成は良寛を「老い衰えて、死の近いのを知った、そして心がさとり澄み渡っていた、この詩僧の『末期の眼』には、辞世にある雪国の自然がなお美しく映ったであらうと思います。」と推測している。死を間近に意識した人の眼に映る風景は、なぜこうも光に輝いているのか。唐木順三の言葉を再び援用すれば、「良寛は、日本人の中の日本人」であった。示寂をまじかにして、良寛の魂はいつそう純化し、日本人の中に脈々として継承されてきた美意識が、今わのきわに、一段と強い光芒を放ったのではなからうか。

良寛は臨終近くなったとき、最期まで看病し、身のまわりの世話をしてくれた貞心尼に対して、己の気持ちを「裏を見せおもてを見せて散るもみぢ」という句にたくして語った。ヤコブ・フイツシェルは、この句を次のように英訳している。

Life is like the gentle fluttering
Of crimson leaves down-borne,
As they fall to the earth—
One by one.

人間の一生はひとしづく露 (Mortal life is as a drop of dew.) のようなもの、と良寛は歌ってもいるが、この辞世の句では、彼の末期の目は、もの淋しい荒野で、沈みゆく太陽の黄金色の光をうけて、深紅の紅葉が、ひっそりと、さびしく散っている紅葉林の荒涼とした風景をとらえていたことであろう。裏を見せたり表を見せたりして、ひらひらと軽やかに散っていく一片の紅葉ばのように、消滅していく自分を騰々として天真にまかせよう、としたのであろう。

「この世に何の所有もなく、心に是非もなかった人が死ぬけしきは、なるほどもみじの葉がうらおもてを見せながら地面に落ちるのに似ていたろう。生にも死にも垣根のない場所にいたのだから、辞世とつたえられる歌も、誰かがよんだのを、時に借用したまでのことであった。」と水上勉は書いている。

「末期の目」とは、死を直前にした時の目をさす。芥川龍之介は、「或旧友へ送る手記」(「東京日日新聞」1927.7.25.)の中で、「けれども自然の美しいのは、僕の末期の目に映るからである」と書いている。自殺願望の強い芥川にとって、自然はいつもより一層美しく見えたのだ。川端の記念講演の中の「末期の眼」とは、ここを踏まえていよう。

康成自身にも『末期の眼』(1933)というエッセーがある。芥川の死の直前の文章などに関わっていることで、昭和史のもっとも危機感にあふれた時代に書かれたものである。「あらゆる藝術の極意は、この『末期の眼』であろう」という一行によって、文学者の業に触れた随想であることが理解できる。良寛にも日本の自然美を追求してやまない業に似た心情があった、と康成はいいたいのであろう。彼は、そのあまりにも日本的な良寛の核心を見事に描写したのである。

三島由紀夫は、『末期の眼』を「永遠の明澄な黄昏のような『藝術の極意』をわがものにした一人の孤獨きわまる芸術家、あるいは達人の姿である。」と評した。三島は、末期の眼が芸術の極意である、と云われると、わかったような気がするが、結局はわからない、と論述している。三島は良寛の歌のような平淡極まる歌には、興味を示さなかったが、古典の桜や紅葉が血の比喩として使われていることを発見したりした。

『末期の眼』で、「いかに現世を厭離するとも、自殺はさとの姿ではない。いかに徳高くとも、自殺者は大聖の域に遠い」と康成は書いている。1927年、芥川の自殺や1970年、弟子三島の自殺は、彼にとってショッキングな出来事であったであろうと推測される。上記の引用と矛盾するようだが、彼自身も1972年にガス自殺をとげた。「さとり」や「大聖」の理想

の人物像として、曹洞宗開祖・道元や良寛を心に描いていたのかもしれない。ついに彼は、敬慕しながらも良寛に両手をかけ、すがりつくことなく逝ってしまった。美の発見は無限であると信じた康成は、誰よりも「もののはれ」を知る作家であった。が、最後にその慰めを否定したのであつた。

ドナルド・キーン氏は、優れた日本文学紹介の第一人者として有名である。良寛の名歌とされる「むらぎもの心楽しも春の日に 鳥のむらがり遊ぶを見れば」を次のように翻訳した上で、「詩は、翻訳不可能だといわれるが、実はかなり多くのものが翻訳によって意を移すことが可能である」と述べている。しかしまた、キーン氏は『おくのほそ道』の学術文庫刊行に当たって、アメリカの詩人口バート・フロストの言葉を引用して、「詩の翻訳によって失われるものは、その詩自体である。」とも記述している。

What joy in my heart
On a day in spring
When I see the birds
Cluster and play!

斎藤茂吉は、この歌をして「むづかしいところの毫もない、平淡極まる歌であるが、滋味豊かにして、心隈なく行きわたり、まづ以って良寛の歌の至上境だと申すことの出来る歌であらう。」と絶賛している。しかしキーン氏は、良寛は、真情の歌人としてひろく知られている、としながらも良寛歌は、真情より小ぎれいのほうが目立っている。それに加えて万葉調が勝ちすぎている、と批判的である。

中野孝次著『良寛 心の歌』（2002）によれば、この歌をとりあげ、「良寛の自我は消えて自然の中にとけ入り、天地と一つになってよるこんでいるような感じがある。鳥と良寛が同じ空気を呼吸し、同じ陽を浴び、いのちを同じくしているのだ。」と表現している。事柄をそのまま投げだしたような単純な歌は、大力倆の歌人か、悟りきった単純徹底の人でなければ作れないものである、と中野は書いている。たしかに良寛以外の誰も歌えない、良寛だけの歌境である。日本人にしかよさがわからない事例といってよいであろう。したがって、そういう名歌は翻訳によって伝達不可能と断言してよいであろう。良寛歌を味わうには、歌会の詠歌のように、ゆっくりと声にだして発音してみるのが一番だ、と筆者はかねて考えている。

「良寛の歌をよむには、そこに良寛のその人を見るのがよく、万葉調だの何だのという分析をしたところで、良寛について何事を言ったことにもなるまい。」という中野の意見に賛同するものである。

平成22年は、良寛没後180周年にあたる記念すべき年にあたる。御風が「世界に出て行く良寛」と言挙げしてからやく70年余の歳月が流れ去った。この間、アメリカ人のJ.ステイブンス『一衣一鉢』（1977）、B.ワトソン『良寛の禅詩』（1977）、阿部/P.ハスケル『大愚 良寛禅師』（1996）などによる良寛の詩歌の優れた英訳が発刊された。石上・イアゴルニツター・美智子が『良寛禅師』（1991）をフランス語で、イタリア人神父・L.ソレッタが『良寛の詩歌』（1994）をイタリア語訳でそれぞれ出版した。特筆すべきは、柳田聖山の『沙門良寛』（1989）が北京大学で中国語に翻訳され、そして2001年5月に「世界良寛研究会」が北京大学で開催された。日本からは、新潟大学名誉教授・加藤僖一団長のもと全国良寛会の11名が参加した。良寛シンポジウムには、中国の研究者が50名ほどと北京大学の学生たちも交じっていた。北京大学の賈蕙萱教授は、「江戸文化僧一良寛」と題して熱意あふれる講演をした。筆者が「中国と大愚良寛」という演題で、盛唐の詩人・李白と良寛漢詩を比較した記念講演をしたことも忘れられない。その夜の懇親会では、中日詩歌比較研究会会長の劉徳有先生の隣席にある榮譽を与えられて、中国漢詩の作詩法の手ほどきを受けたことは光栄であった。

良寛生誕の地 出雲崎：日野資朝、芭蕉、木喰行道

1758（宝暦8）年に良寛は、当時佐渡の金銀の陸揚げ場として栄えていた出雲崎の名主兼神官でもあった橘屋山本家で呱呱の声をあげた。

その橘屋山本家は、代々名主でかつ石井神社の神官を兼ねていた。その遠祖をたどれば、奈良朝の有名な政治家・左大臣橘諸兄たちばなのもろえにまでさかのぼるといはれる旧家である。橘諸兄の子に泰仁やすひとと泰明やすあきがあり、その泰明の子に泰則やすのりと泰教やすのりと同じ音の子供があった。その泰教の5男に山本中納言泰実やすざねという人があった。橘諸兄の曾孫にあたるこの泰実が橘屋の祖先である。泰実が死んだのは平安朝の始めの頃、平城帝の御代で、空海が大唐国から帰朝した年にあたるということだ。

2010年は、平城京遷都1300年という記念すべき年であったが、遠祖の橘家が栄えたのは、大仏開眼の時代からである。ちなみに左大臣橘諸兄が天平18年（746）正月、天正天皇の御在所に諸臣を帯同して雪搔きゆきかきに供奉した時、この雪にちなんで和歌を奏するよう勅使をうけ、応えて次の一

首を詠んだ。万葉集に載っているにせよどうということもない和歌に思える。

降る雪の白髪までに大君に 仕え奉れば貴くもあるか

それから時代は500有余年下って、南北朝時代の後醍醐天皇の正中2年（1325）12月、中納言日野資朝卿は、北条高時のために佐渡に配流になる時、海が荒れてなかなか渡れなかった。この時出雲崎の山本家の当主山本信阿の家に、船の出帆を待って長逗留していた。ようやく嵐もやみ、風いだ海に船出するにあたって、資朝は世話になった信阿に感謝し、庭先の橘を見て次のような一首を詠んだ。この短冊は今なお子孫の家に保存されている。

忘するなよほどは波路をへだつとも かはらず匂へ宿の橘 資朝

信阿の家の庭に橘の木があって、それが芳香を放っていたのである。芳香の広がる橘を家運繁栄にたとえたとも読める歌である。

資朝は、佐渡の檀風城に幽閉されること7年、元弘2年（1332）城主・本間氏は高時の命によって資朝を処刑した。遺体はここで茶毘に付し、遺骨は従者が高野山へ葬ったとも伝えられる。資朝は、明治8年（1875）真野宮に合祀され、同17年に従二位を贈られた。

余滴となるが、佐渡に帰る度に立ち寄る阿仏坊妙宣寺という古刹がある。松林に囲まれ、県下唯一の五重の塔がひっそりと、真っすぐ伸びる松の木と背を競うように美しく立っている。五重塔は島内大工により建てられたものだとなれば、ひとしお身近なものに感じられる。その境内には、正中の変に流されて、斬首された資朝卿の墓がある。夏には降るような蝉時雨が聞こえ、秋には紅葉が美しく、檀が小さな赤い実をつける。墓の左に建つ資朝の歌碑がある。

秋たけし檀の梢吹く風に 澤田の里は紅葉しにけり 資朝

2010年5月30日、中宮寺門跡・日野西光尊師は、阿仏坊妙宣寺を初めて訪問し、「佐渡の地に先祖日野資朝卿の史跡を訪ねて詠める」として、短歌5首を残した。最初の3首をここに紹介しておきたい。

佐渡が島資朝卿のあとたづね 処々に偲ばる六ももとせの秋
 ひばり鳴き早月晴れたる佐渡の島 墓に詣でその上偲ばる
 細字にて経うつします筆の跡 きみのみこころ如何ばかりにや

謡曲「檀風」は、佐渡の日野資朝卿をテーマにした謡曲として知られる。妙宣寺の資朝卿の墓の近くには、一子梅若の仇討の日の隠れ松の跡が残っている。

この妙宣寺を訪れた斎藤茂吉は、「いつくしき五重の塔のたてる見つ 佐渡の心は浅からなくに」と歌った。「いつくしき」とは、おごそかで立派という意味である。藤井三好編『斎藤茂吉の佐渡小吟』（2007）によれば、順徳上皇に供奉し、のちに日蓮に帰依した阿仏坊日得開基の寺で、その妻の千日尼は日蓮に母親のように慕われたという。また芭蕉の研究家のドナルド・キーン氏の吟句に、「罪なくも流されたしや佐渡の月」がある。この句は、榎本其角の「罪なくて配所の月や佐渡生まれ」をひびかせた句詠であろう。2010年12月1日、第5回「安吾賞」の受賞記念講演のために、新潟市にやってきたキーン氏は、「私は生涯に、唯一句の俳句しか残せなかった。」と語った。芭蕉の俳句を背景にしては、句詠も難しかったのではなかろうか。

茂吉もキーン氏も、順徳上皇、日蓮、資朝そして世阿弥など、佐渡島への古の配流人に思いをはせて、「佐渡の心は浅からなくに」と実感したのであろう。

江戸時代の佐渡の金銀の埋蔵量は世界的にみても屈指であり、佐渡の小木や相川は入船千艘、出船千艘といわれ、その町の遊女は江戸、大阪、京について羽振りがよかった、と伝えられている。佐渡奉行など多くの人々がこの越後出雲崎港を利用して海を渡った。良寛の生家は本陣と定められ、將軍巡検使や諸大名などが宿泊したのだから、大きな権力を握ってと考えられる。寛保年間には、廻船問屋連合も成立し、出雲崎代官の権勢を借りて、千石級の大形船を許可なしに他の港に入港させなかった。橋屋はその通行権も握っていたように思われる。やがて橋屋は、隣町の尼瀬の京屋と出雲崎の年寄格敦賀屋とを相手として、それぞれの利権を巡って、熾烈な争いに巻き込まれていくのである。

出雲崎は、良寛の生誕の地とされ、18歳の時に近隣の尼瀬町の禅寺・光照寺に駆け込んで庵を結んだ土地でもある。江戸時代の元禄の頃、松尾芭蕉が奥の細道の行脚の際、この出雲崎の良寛の生家の近くの旅籠屋に投宿した。出雲崎は、芭蕉が豪壯雄渾な名吟、「荒海や佐渡に横たふ天河」

を残した場所として知られている。荒海は広く、その向こうに佐渡の島影が見え、その上空に天の河が白く横たわっている。この句は、ただ雄大な句であるだけではなく、昔から順徳院や日蓮、日野資朝卿や『風姿花伝』（1400）を残し、幽玄の能を完成させた世阿弥などが遠流の地として、佐渡島に流され、望郷の念にさいなまれていた悲劇的な人々の寂寥を思いやり、芭蕉自身の旅愁をも重ねた心象風景を詠んだものである。窓を開ければ、月の暗い波の上に銀河が冴え渡って架かっている。この光景を眺めた芭蕉は、旅愁というような穏やかな感傷ではなくて、激しい慟哭の感情に衝き上げられたであろう。順徳院や日蓮、そして資朝など、島流しになった人々の魂が取り憑いたような精神状態となり、時空を超えた魂の交感ができるような、激しく高揚した心持ちとなったのではあるまいか。この憑依した心境をどのように理解すればよいか。普段は静かなる禪者としての矜持を崩さない芭蕉であったが、激しい日蓮の精神が乗り移ったのか、豪壯雄渾ないわば攻撃的な高揚感から、目の前の神秘的な宇宙や非情な歴史を攻撃する精神状態になり、そうして掴んだのが「荒海や一」の句である。この句が詠まれて三百数十年たった今も、たとえ文法上の瑕疵があるにせよ、人々を感動させるのである。立松和平は、「『荒海』の中に、非情な歴史への憤りを込め、海に隔てられた流人の悲しみを描き、その魂が時空を超えて天空に輝いていると表現するのである。一瞬にしてこれだけの世界を五七五の言葉の中に込めてしまう芭蕉の表現力は、日本の長い文芸史の中でも異彩を放っている。」と書いている。（『芭蕉 「奥の細道」内なる旅』参照）

〈人生これ旅なり〉とみなした芭蕉は風雲の思いにとらわれ、旅に出て旅で死のうと願い、旅によって風雅の道を究めようとした。一所不住の風狂乞食のような旅の境涯は、芭蕉にとって身に付いたものになっていた。出雲崎に来て、長旅の疲れもあって、心神耗弱の精神状態にあった芭蕉は、「己を捨てた」のだ、と考えたらどうであろう。自己への執着を捨てることができたのであれば、その場所こそまさに悟りの場所である。そして「荒海や一」の名句を残した。芭蕉の悟りの境地は、美しくもあり雄渾でもある。

芭蕉が、片雲の風に誘われて、漂泊の思いやまず、「奥の細道」の旅に向かったのは、1689（元禄2）年3月27日であった。行程およそ600里、日数150日余であるから大旅行であった。時に芭蕉、46歳。『曾良旅日記』（6月25日）には、「大山二着ク。状添ヘテ丸や義左衛門方二宿」とある。大山とは現在の鶴岡市大山のことである。名著『文学のレッスン』

(2010)などで知られる日本文壇の最長老・丸谷才一氏の語るところによれば、彼の遠い祖先は鶴岡で芭蕉を泊めたのだそうである。(D.キーン著『私の大事な場所』参照)

「暑き日を海にいれたり最上川」という名吟を残し、6月25日に酒田を出発して、新潟を経て金沢を目指した芭蕉は、新潟までの9日間を要しているのに、「暑湿の勞しんに神を悩まし、病おこりて事をしるさず」とあるように、句をかかげてはいない。しかし、実は上記の名吟「荒海や一」の他に、越後で次の3句を詠んでいる。

ふみづき むいか
 文月や六日も常の夜には似ず
 うきみやど
 海にふる雨や恋しき浮身宿
 ひとつや いうちよ はぎ
 一家に遊女も寝たり萩と月

「荒海や一」「文月や一」と「一家に一」をキーン氏の名訳から引用したい。

Turbulent the sea—
 Across to Sado stretches
 The Milky Way.

The seventh month—
 Even the sixth does not seem
 Like a usual night.

Under the same roof
 Prostitutes were sleeping—
 The moon and clover.

出雲崎では、江戸時代末期に、木喰行道もくじきぎょうどう (1718-1810) は海辺にある行屋ぎょうやに泊り、佐渡に渡る船の風待ちをした。「くる日もくる日も、お上人は海を眺めて過ごした。佐渡はそこに見えているのに、西方浄土でもあるかのように遠かった。不動明王の炎のように、波は忿怒ふんぬの相を現していた。それはお上人の心の中の光景かも知れなかった。」と上人に寄生しらみしている虱は上人を観察している。5月なのに雲は海の上に低くかかり、繰り返して寄せてくる波も荒かった。

出雲崎から佐渡に渡った木喰上人のことにも少し触れておきたい。上人

は別名を三界無庵無仏という。彼は雲のように漂い、水のように流れて、よるべをもたない、行雲流水の遊行僧である。木喰戒をしているから木喰行道と自ら名乗った。木喰戒とは、米、麦、粟、黍、豆の五穀を断ち、火にかけた食物、すなわち火食をとらない。はっきりいって上人の血はうまくない、と上人の襟元にたかっているのみ蚤はいう。時おり栄養が足りなくなって、蚤は足元がふらふらする。この蚤が上人にとりついているのは、お上人の血だけで生きていれば、自分も木喰戒の修行をしているのと同じことになるのである。またこの蚤は、上人に寄生している虱のことを朋輩と呼んでいる。上人は諸国を巡り歩く廻国聖であるから、自分は上人の襟首や顎鬚につかまっているだけで、あっちこっちが見物できる、と計算している俗物の虱である。そんな俗物の虱と自分はまったく違うのだという自覚が、蚤にはあった。

| | | |
|--------------------------------|---------------|-----------|
| 木喰の裸の姿眺むれば | のみやしらみの餌食なりけり | 木喰行道 |
| のみしらみ <small>こゝろ</small> 音をたてて | 鳴く虫ならば | わが懐は武蔵野の原 |
| 良寛 | | |
| 夏の夜やのみを数えて | 明かしけり | 良寛 |
| のみの迹 <small>あと</small> 数へながら | に添え乳かな | 一茶 |
| 蚤虱馬 <small>のみしらみ</small> の尿する | 枕もと | 芭蕉 |

立松和平の小説『木喰』（2002）の冒頭は次のように始まる。

「雲のごとくさだまれる住所もなく、水のごとくに流れゆきて、よるとろもなきをこそ、僧とはいうなり。」

この作品のユニークなのは、語り手がこの上人にすがりついて生きている蚤と虱となっていて、物語を紡ぎだす、という構成となっている。2匹の寄生虫は言葉を交わす。虱は、「二人の心がまったく一致するのを、感応道交かんのうどうこうというのだよ。お前とおいらとは今しばらく生死の中の朋輩だが、いつの世かはお前が師となりおいらが弟子ともなる。何の因果か今はのみとしらみの姿をしておるが、しばらくの生死の中の因縁にすぎず、来世には菩薩になれるよう精進しようじゃないか。なあ、朋輩。」と蚤に語りかける。虱と蚤は鼠衣の垢にまみれた襟足のところで、またもや固く抱き合った。美しい邂逅があったのである。上人は自分自身でも知らないところにまで功德をもたらしけていたのである。

良寛と同時代に生きたが、おそらく良寛とは接点はないであろう木喰行道は、出雲崎から船に乗り、小木に入港した。小木の港は大きな船が繋留されていた。西廻り廻船の北前船なのであろう。港に面して廻船問屋や米

穀商や船宿がならんでいた。行く道の途上にある小比叡山蓮華峰寺に立ち寄り納経する。弘法大師が創建したと伝えられる古刹である。嵯峨天皇の勅願寺である。次いで羽茂に行き、佐渡一宮である度津神社に納経した。また杉の中に玉垣をめぐらした真野御陵別当に納経する。承久の変で佐渡に配流された順徳上皇は、22年間ここにおられ、46歳で崩御した。ここは茶毘塚で、遺骨は京都の大原にあるという。このように考えてくると、佐渡には、名を残さなくても、いたるところに聖が修行し、この上ない悟りの境地にはいった跡があった。「この上ない境地とは、煩惱を完全に滅すること、すなわち入滅することだ。」と立松は書いている。木喰上人は、五穀断ちをして生きながら餓鬼道に墜ちた聖であり、できる限りの煩惱はすでに断っていて、生きながらすでに死の世界に入っているのであった。佐渡の人々の心は平安で、旅をしていて気持ちがよいところであった。煩惱を滅するためにことさら餓鬼道にはいらなくてもよいのではないかとさえ思えてくる。

64歳になった上人は、ひとつの誓願をもって佐渡へやってきた。作仏さくぶつ聖の初祖ともいわれる弾誓上人の菩提をとむらうためであった。『木喰』の最終章は「おしろい地蔵」（佐渡一相川）となっている。相川では、人間の腰ほどの高さのある蓮華の台にのっている地蔵菩薩を彫った。掌は宝珠を持っているのではなく、禅定印を結んでいる。

木喰上人は、鑿の頭を木槌で打ち続けながら、お地蔵さまを彫っている。その音が少し離れた波の音と重なった。一心に彫り進めながら、いつものことだが時の経つのを忘れた。今この娑婆世界に示現しつつある木の地蔵菩薩は、目を細め、頬の肉を盛り上げて、深く穏やかな微笑をたたえている。大きく深く豊かな永遠の慈悲の笑顔を刻んでいるのであった。

窓の外には中天に満月が架かっていて、金色の柔かそうな光を投げかけている。この世は美しく満ち足りていて、何ひとつ足りないものはないのである。人の強欲が不足をつくるのだ。「燃やされるつもりで軒下に積まれている流木の中にも、仏はいる。すべてが仏なのだから、すべては美しい。」と上人は思う。海辺は寄せては返す波の音だけであった。日本海の灰色に濁った海が、時折高い波を運んで来ては、岩を叩いていた。

阿弥陀如来は皆が生まれようと望んでいる極楽浄土をすみかとされる仏である。だれもが合掌する指先から5色の糸がでる糸引き弥陀に導かれて極楽浄土に行きたいと願っている。極楽浄土はこの世にない宝で莊嚴されている。7種の宝、すなわち金、銀、瑠璃、水晶、赤真珠、碼瑙めのう、琥珀こはくによって、底に金の砂がまき散らされた蓮池がつくられ、宝樹が生じ、目に

美しいそうだ。天の音楽がつねに奏でられ、天の曼陀羅華の雨が夜に3度と昼に3度ずつ降るそうだ。白鳥、帝釈しぎ、孔雀が夜に3度と昼に3度集まり、それぞれいい声で鳴いている。しかし真の修行を達成した者は、自分自身の極楽往生をする前に、人の間に残ってその救済に全力を尽くすということではなかろうか。（『木喰』「作仏」参照）

一方、地藏菩薩は阿鼻叫喚の奈落におられる。すべての衆生を余さず洩らさずに救うという悲願を立て、すべての衆生の最低のそのまた底の地獄を終のすみかとなし、無限の慈悲心と不断の精進心とともに生活しているのだ。しかも如来の地位には上がらず、自らを菩薩の地位にとどめ置いている。地藏菩薩は地獄をすみかとしているのであって、阿弥陀さまとは立場が違うのである。

六地藏とは、地藏菩薩、宝掌菩薩、宝処菩薩、宝印手菩薩、持地菩薩、堅固慧菩薩で、姿はほとんど同じものだが持ち物が宝珠や輪宝や剣などと少しずつ違う。地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上と、それぞれ教化する場所も異なっている。六道におられる菩薩が、力を合わせて衆生を救っているのである。

筆者は、木喰行道が実際は、どのように入定されたかを知らない。長いこと木喰行をした上人の身体は、痩せさらばえており、いつ即身成仏をしてもよい状態にあった。上人は弟子の白道に向かって、次のように話している。

「里人が見守る中を棺にはいり、上から土をかけてもらう。この助けだけは、どうしても必要なんじゃ。竹筒を地上にだして息をして、真暗な棺の中で鉦をたたき念仏を唱えておる。鉦の音も念仏も聞こえなくなったら入定したと思ってくれと里人にはいってあるので、里人は何度も竹筒に耳をあてては、ああまだ生きていると思って念仏を唱える。本当に静かになるのは二十日を過ぎた頃じゃろ。」こういった話は、筆者が幼少の頃、真夏の夜の寝物語に祖母から聞いた、村はずれにある六部塚に眠る六部の物語と酷似しているように思えてならない。

立松和平の小説『木喰』は、下記のように結ばれている。

「三界の狂人は狂せることを知らず。

四生の盲者は盲なることを識らず。

生まれ生まれ生まれ生まれて生の始めに暗く、

死に死に死に死んで死の終りに冥し。」

木喰上人は、発心してからずっと心の奥底に刻まれている高祖大師遍照こうそだいしへんじょう金剛空海の言葉を、あたかもお経を唱えるように口に出していった。

立松作品の『木喰』は、61歳から64歳までの間、蝦夷から佐渡までの上人の廻国巡礼の旅を描いている。が、実際には上人は遊行僧として、50歳から90余歳までの約40年間、北は北海道から南は九州まで、巡礼の旅を続けて仏像を刻んだ。各地に残る微笑仏は、現在でも人々の信仰の対象になっている。

行く雲のように、流れる水のように、とどまることなく道をいくのを、僧という。だとすれば、木喰上人こそ僧の中の僧であった。生涯を通じて全国を行脚し、信仰の行として1000体以上の仏像を彫刻した。

木喰上人と並び称される、江戸時代初期の天台宗の僧侶で円空（1632-1695）がいる。後西天皇より上人号を下賜され、今行基と呼ばれた。円空は日本各地を遍歴して、生涯を布教活動と造像活動に捧げた。生木を鉋で断ち割り、背面は手を加えず、全部半面に仏像や神像などを鉋、鑿、小刀で荒彫りしたもので、円空仏とも称される。全国に数千の作品が現存する。

おわりに

菩薩半跏思惟像（如意輪観世音菩薩） 断想

「奈良の古寺と仏像～會津八一のうたにのせて」展が、紆余曲折あって、新潟市での開催を断念せざるをえなかった時、古町界隈の活性化すら視座に入れて準備してきた関係者は、断腸の思いであったことであろう。腰折れ一首詠めない自分でさえ、吉井勇風に〈思惟菩薩 越の旅路へ立ちませと 秋艸道人 歌よみたまへ〉とメモ帳に書きつけたくらいである。

首を回らせば、世界の三大微笑と讃えられる、国宝中の国宝である中宮寺の菩薩半跏像を拝観したのは、もう半世紀以上も前のことで、国語の教科書に載っていた會津八一の歌の数首を耳ぶくろに入れ、和辻哲郎の名著『古寺巡礼』（1947）や亀井勝一郎著『大和古寺風物誌』（1953）などを味読したにすぎない、一知半解の少年の頃である。ほの暗い小さな尼寺で、若々しく楚々とした思惟像のあの幽遠な、かすかに微笑んだ口辺から、「もっとおそばに」というお声が漏れてたような幻夢のなかで、いざり寄り、跪拝していた。この時、拝まれる仏と拝む自分があるだけの贅沢きわまりない至福の時を持てたのだが、まさに仏縁に恵まれたとでもいうべきか。

みほとけのあごとひぢとに尼寺の 小暗きあさのひかりをぞみし
観音のあごと肘とに尼寺の 小暗きあさのひかりをぞみし

みほとけのあごとひぢとにあまでらのあさのひかりの
ともしきろかも

「中宮寺」と詞書にある、會津八一の一首目の歌は、大正9年12月31日付、坪内逍遙宛の封書に見える。次の二首目の歌は、明けて1月6日付の書簡で、「少しく推敲を加へ」て、逍遙に送っている。さらに舌頭に千転させて推敲を加えた、三首目のかな分かち書きの歌が決定稿となった。

博覧強記の八一の歌には、人を惹きつけては突き放す、晦渋癖とでもいいたい、難解な歌が少なくない。『新編国歌大観』（1983～92）で各巻索引を確認したところ、決定稿にみる「ともしきろかも」の用例は、万葉集と古事記に各一例ずつが採録されているのみである。八一がこの語句を援用した眼目は、難解度を高めて、前半句と後半句の歌のバランスをとり、重厚味を醸し出したかったのであろう。また自註には、「この半跏ほんか しゆいぞう思惟像の一種微妙なる光線の反影を詠みたるものなれども、この光沢は近時この寺の尼僧たちが、布片などにて、しきりに仏身に払拭を加ふるために、偶然に生じ来たりしものにて、製作の最初には、かかる光沢は期待されざれしなり。」と解説している。

前述したように、大正9年の師走に中宮寺を訪れた八一は、菩薩半跏像を拝観した。うっとりとして伏目がちに瞑想している眼とアルカイック・スマイルと呼ばれる微笑を浮かべている口元。境内の白壁に反射した朝の陽光が、仏殿の明かり障子越しに仏像の顎と肘のあたりに、ほんのりと射し込み、み仏は柔らかな自然光で包まれる。静かな尼寺の朝の雰囲気心惹かれた八一が、その情景をうたったものである。この頃の八一は、早稲田中学の教頭職にあり、彼の主張する全人教育の教育方針をめぐる、憤激することがあって、内部の衝動にかられるように、一種の感傷旅行に出たのであった。この時、八一の傍らには、写真家・小川晴暘の姿もあったのではと思ひ立ち、手許の島村利正の『奈良飛鳥園』（1980）を繙いてみたが、それはありえないということがわかった。

歌人柳原白蓮は、中宮寺の本尊・如意輪観世音菩薩像をストレートに詠まずに、千年の歴史を誇る尼寺の軒に垂れる白藤の香気ただよう庭の描写をしながら、本尊が伏し目がちに瞑想し、毅然として座す崇高なお姿に、時空を超えて拝観する人の胸に染み入る飛鳥仏であることを予感させるような作詠ぶりとなっている。

千年の歴史がつくるかほりあり尼御所の軒の白藤の花

Scent of a thousand year's history,
white wisteria under the eaves
of Chūgūji nunnery.

(trans. by Harue Aoki)

如意輪観世音菩薩は、蕨のような形の垂髪には古い表現を残しながらも、ゆったりと微笑する顔の表情や調和のとれたプロポーションには、飛鳥時代前期の新しい感覚がある。一般的には、半跏思惟像の多くが前傾姿勢をとっているが、この如意輪観世音菩薩像は上体をずっと伸ばして、毅然とした美しさがただよう。後ろ姿は、前面とは一変してシンメトリーな上半身が現われる。なめらかに肉付けされた乙女のような背中から腰にかけては、自然なくびれが表現されている。この本尊は、悩めるものすべての苦しみを救いにとってくれるありがたい救世の菩薩で、半跏思惟のポーズはロダンの傑作「考える人」を思わせる。その美しいお姿から、太秦広隆寺と同じ弥勒菩薩だとする説もある。弥勒菩薩とは釈尊も救済できなかった、いっさいの衆生を救うために、出現の約束の時まで、今は兜率天で修行中であるとされている。

「弥勒菩薩は未来仏である。弥勒菩薩が下生されるのは、56億7千万年後のことである。末法の世を過ぎてのち、釈迦の説法にもれたすべての衆生を救済してくださる。弥勒は阿逸多と申される。この世に生を受け2カ月15日の後に、結跏趺坐のままこの世での生を終え、須弥山の天上虚空にある兜率天でこの今も寂靜三昧の修行を続けておられる。56億7千万年の天寿が尽きると、この世に生まれ変わってこられる。釈迦の説法を聞いた人もあろうが、改めてこの世に現われる弥勒菩薩の説法はいまだ誰も聞いていないのである。」と立松和平は、小説『木喰』の中で記述している。

中宮寺門跡の日野西高尊師は、平成22年6月3日の新潟での講演「修羅の世を生きて」の中で、中宮寺のご本尊は、如意輪観音さまであり、弥勒菩薩ではありません、と明言された。今ここに苦しめる人々を救ってくださるありがたい観世音菩薩なのである。

この時代の木彫像は、基本的には一本の木から彫る一木造であるが、しかし如意輪観世音菩薩像は多くの木片をブロック状に積み上げ、鉄釘でつないでいる。後世の寄木造とも異なる独特な構造であるという。

仏師の名前は不詳であるが、この仏像は、この世に生きる人々がみな幸福であることを願い、その実現のためには何をなすべきか、瞑想している仏像である、といわれている。仏師もそういう厳かな気持ちで刻んだものであろう。

平成22年4月24日、近代美術館の「奈良の古寺と仏像～會津八一のうたにのせて」展の開場式に出席した後、午後からは會津八一文学研究の泰斗・和泉久子氏と共に、「會津八一の生涯と業績をたどる」展（會津八一記念館）と「會津八一と小川晴暘」展（新潟市美術館）を参観した。この日は、「観佛三昧」の一日であった。市美術館では、中国山西省大同の「雲岡石窟」展を観た。そこで小川晴暘撮影の雲岡石窟の数々の写真と彼の直筆の超パノラマスケッチに圧倒された。石窟は武周山北崖の山腹に開鑿され、東西一キロに連なる。現存の洞窟は53、造像5万1千余軀、中国における最大級規模の古代石窟群のひとつである。会場でたまたまノートパソコンを手に確認作業をしている、美術史学者・賈鍾籌教授に邂逅した。彼は、「本場の中国では、自然浸食とプロレタリア文化大革命期の人的破壊があり、晴暘の写真で確認するより他にないのです」と語った。さらに教授は、第六洞の明窓西側の半跏思惟像を示し、これが中宮寺の菩薩半跏像の源流となっているものです、と語った。それは釈迦の悉達多太子時代の半跏思惟の姿である。太子が入山に乗ってこられた愛馬カンタカは、矮小化されて現れ、太子の左の足元で前膝を折っている。が、首の大半は破損している。八一が早稲田大学の日本美術史の講義で、中宮寺の半跏像について講義をした際、「人生のセンチメンタルな瞑想をしている姿で、悉達多太子像である」と語ったことを思い合わせると、あらためて声をのむような感動を覚えた。自分は晴暘の次男の光暘の弟子である、と賈教授は語った。すると彼は、會津八一の孫弟子ということにもなる。この一期一会ともいべき奇遇で、教授の解説からおおいに学び、かつ会話を楽しんで別れた。

八一の高弟・宮川寅雄は、「雲岡石窟について」の中で、會津八一が憧れ、一度も踏み入れる事ができなかった雲岡石窟の晴暘の写真が「うず高く積み、これも晴暘手拓の雲岡彫刻の拓本ともども、それを、飽くことなく眺める秋艸堂主人のポーズも忘れ難い」とも、また「秋艸道人の書斎には、その死にいたるまで、小川晴暘の撮影になる雲岡石窟の第五窟前壁の東側菩薩半身像の、かすかに微笑をたたえた表情が壁間にかかっていたのを、今に思いおこすのである」と解説している。（『雲岡の石窟 小川晴暘』新潮社版（1978）参照）

會津八一は、「自分は生涯通じて学匠である」という不動の信念を持っていた。そして何よりも「実学のこころ」を大事にしていた。英文学者として、ギリシャなどにも古代憧憬への熱い思いを持っていたし、雲岡石窟にも大きな関心を寄せ、一時期中国に渡るべく乗馬の練習にも励んだ、と

いう。上記の宮川寅雄の文章からも、會津八一の心境を、今に思い起こすことができるのである。

主な参考文献

- ・ Donald・キーン著『日本文学の歴史』近世篇7-8(中央公論社、1995)
『英文収録 おくのはそ道』(講談社学術文庫、2007)
 - ・ 相馬御風著『良寛百考』(有峰書店、1935)
『新版 一茶と良寛と芭蕉』(恒文社、1997)
 - ・ 谷川敏朗著『校注 良寛全詩集』(春秋社、1998)
『校注 良寛全歌集』(春秋社、1996)
『校注 良寛全句集』(春秋社、2000)
 - ・ 立松和平著『良寛』(2010、大法輪)
『流れる水は先を争わず』(立松和平追悼集、2010)
『良寛 行に生き 行に死す』(春秋社、2010)
『良寛のことば』(考古堂、2010)
『良寛さんの漢詩』(二玄社、2010)
『良寛さんの和歌』(二玄社、2010)
『道元禅師』(上・下巻)(東京書籍、2009)
『芭蕉「奥の細道」内なる旅』(校成出版社、2007)
『木喰』(小学館、2002)
 - ・ 玉木禮吉著『良寛全集』【復刻版】(牧野出版、1994)
 - ・ 石田吉貞著『良寛 その全貌と現像』(塙書房版、1979)
 - ・ 竹村牧夫著『新装版 良寛の詩と道元禅』(大蔵出版、1991)
 - ・ 五木寛之×立松和平(対談)『親鸞と道元』(祥伝社、2010)
 - ・ 『奈良の古寺と仏像—會津八一のうたにのせて—』展(平城遷都1300年記念)
(日本経済新聞社、2010)
 - ・ 豊原治郎著『学問の向こうに』(中西印刷、2010)
- ※本書は、豊原治郎氏逝って7回忌の12月1日に、豊原晴子夫人を中心にご遺族の協力を得て、遺稿をまとめて発刊された。會津八一研究の第11冊目となる、価値ある研究書である。

付記

1. 「はじめに」の拙稿は、『大和し美し』(求龍堂、2008)の中の拙文「世界に生きる良寛」に加筆したものである。
2. 「おわりに」の拙稿は、『秋艸』(第30号、2010)の中の拙文「菩薩半跏思惟像 断想」に加筆したものである。